

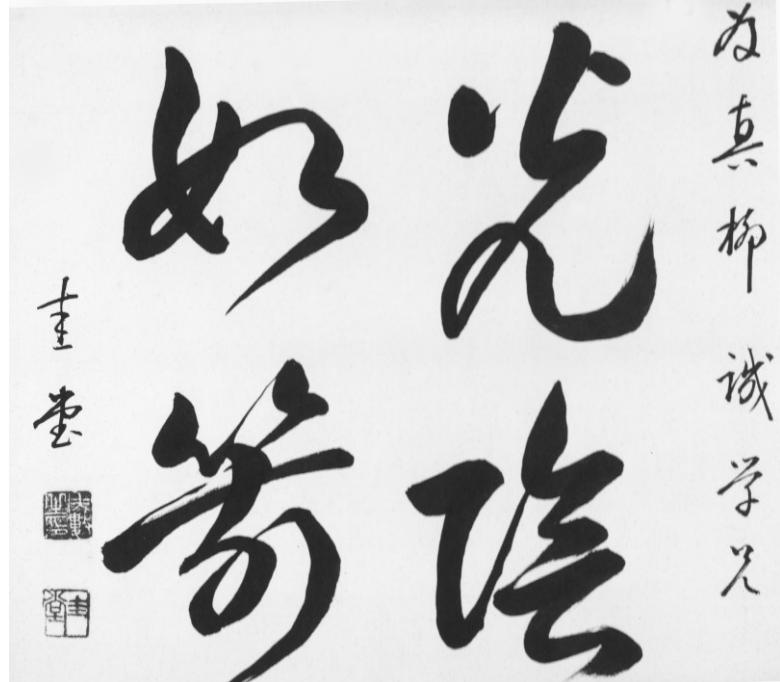
矢数圭堂先生との永別を悼む

真柳 誠



2002/12/21 「道明先生を偲ぶ会」にて遺影を掲げる圭堂先生と真柳、その左に矢数芳英・平馬直樹の両先生

先生に最後にお会いしたのは二〇一七年の三月九日、初台のリハビリ病院に入院されていました。ご容体がおもわしくないと仄聞したのでお見舞いにうかがつたのですが、さいわいリハビリでかなり回復され、お元気だったため安堵した。二〇二〇年の



圭堂先生の揮毫「光陰如箭」

日にご逝去されたとの連絡を十七日にいたしました。ただ十九日の通夜も二十日の告別式も家族葬ゆえ参列できない。新型コロナ第六波のためだが、無念だった。それで一昨晩（二十日）は在りし日の先生を偲び、ひとり献杯した。親しくさせていただいた先生がまたもや旅立ち、ただ無常というしかない。圭堂先生は享年九十、矢数道明先生は九十六だったのでも、やや早かつたといえる。でも先生より一歳年長で、満七十九歳で亡くなられた大塚恭男先生よりもはご長命だった。

二月にも入院されていた神田の病院にうかがう予定だったが、コロナの第一波がはじまり、断念するしかなかった。そして今回の訃報である。残念でしかたない。

先生との親炙は一九八三年の九月からのこと。当時、北里東医研の医史研で無給の客員研究員となり、これに配慮された所長の道明先生が、温知堂矢数医院でわたしに秘書兼蔵書整理の仕事をくださつたからだつた。ほぼ同時に温知堂にも入会したので、圭堂先生とはかれこれ三十数年ほど拝眉の榮に浴したことになる。

それは矢数医院や温知堂での談話、飲み会や忘年会などにおよび、カラオケで先生の美声を拝聴したことも多々ある。ときにはご自宅にうかがい、お好きだつたニッカのシングルモルトを賞味させていただいたこともあつた。みな楽しい記憶ばかりなのは、もともと先生には尊大などのかけらもなく、誰にたいしてもそうだつたからである。いまは天上界に幽居され、安寧な日々をお過ごしだろう。

ここに先生との永別を悼み、ご冥福を衷心より祈り申し上げます。